成人中・後期における死に対する態度と心理的 well-being (2)

3 年間の縦断的变化における関連

○丹下智香子¹・西田裕紀子¹・富田真紀子¹・大塚 礼¹ (非会員)・安藤富士子^{1,2}・下方浩史^{1,3}

(¹国立長寿医療研究センター NILS-LSA 活用研究室・²愛知淑徳大学健康医療科学部・³名古屋学芸大学大学院栄養科学研究科)

キーワード: 死に対する態度 心理的 well-being 成人中・後期

Relationship between attitude toward death and psychological well-being in Japanese middle-aged and elderly (2): Longitudinal change in 3 years

Chikako TANGE¹, Yukiko NISHITA¹, Makiko TOMIDA¹, Rei OTSUKA^{1,*}, Fujiko ANDO^{1,2}, and Hiroshi SHIMOKATA^{1,3}

(¹National Center for Geriatrics and Gerontology, ²Aichi Shukutoku Univ., ³Nagoya Univ. of Arts and Sciences)

Key Words: Attitude toward death, Psychological well-being, Middle-aged and elderly

目 的

成人中・後期において、死の主題に取り組むことは重要な発達課題の一つとなる。しかしながら我が国で死の主題の相関に関して実証した研究は少ない。本研究は約 3 年間の縦断的データを用いて、加齢において発達課題に適応するための心理的資源となることが示唆されている心理的 well-being (Ryff et al., 2016) の変化と、死に対する態度の変化との関連について解明することを目的とした。

方 法

分析対象 「国立長寿医療研究センター・老化に関する長期縦断疫学研究(NILS-LSA)」の第 7 次調査 (7th; 2010.7-2012.7)・第 8 次調査 (8th; 2013.10-2016.2) に参加し、両回とも下記 2 尺度に回答した 1848 名 (男性 933 名、女性 915 名。7th 参加時で 40-89 歳、平均 59.9±11.9 歳) を分析対象とした。

尺度 (1)死に対する態度尺度(ATDS-A; 丹下ら, 2013): 「死に対する恐怖」(ATDS-A1)、「死後の生活の存在への信念」(ATDS-A2)、「生を全うさせる意志」(ATDS-A3)、「人生に対して死が持つ意味」(ATDS-A4)、「身体と精神の死」(ATDS-A5) の 5 下位尺度から成る。(2)心理的 well-being 尺度(PWB; 西田, 2000): Ryff(1989)の概念に基づく尺度で、「人格的成長」、「人生における目的」、「自律性」、「自己受容」、「環境制御力」、「積極的な他者関係」の 6 次元から成る。

解析 死に対する態度と心理的 well-being の縦断的变化の関連を検討するため、潜在変化モデルを用いた解析を行った (下図参照)。まず測定時期ごとに、死に対する態度は項目得点から上記 5 側面をそれぞれ潜在変数として構成した。心理的 well-being は上記の 6 下位尺度得点 (当該項目得点の合計点) を観測変数として、一つの潜在変数を構成した。そして死に対する態度 5 側面と心理的 well-being の各「レベル」(ベースライン)と「変化」を潜在変数として想定し、これらの相関係数を算出した。解析には Mplus ver. 7.4 を用いた。

図 ATDS-AとPWBの関連を解析する潜在変化モデル(部分)
注1)誤差。ATDS-A3~ATDS-A5は記載を省略した。
注2)7th・8thで同じ観測変数には誤差相関を想定した。

結 果

結果を表に示す。「変化」同士の関連に注目すると、心理的 well-being の変化は、死に対する態度の中では「生を全うさせる意志」の変化と正方向の関連を示した。また、死に対する態度尺度内で、「死に対する恐怖」、「死後の生活の存在への信念」、「人生に対して死が持つ意味」の変化は相互的に正方向の関連、「死に対する恐怖」と「身体と精神の死」の変化は負方向で関連を示した。

考 察

3 年間という比較的短期間での追跡データを扱った今回の結果からは、「心理的 well-being」の感覚が強くなること、死に対する態度の中でも特に「最後まで生き抜くという意志の強まり」という、生に重点を置いた側面の変化と連動することが示唆された。横断的研究においては、心理的 well-being と、死と生の両者に対する肯定的な態度の関連が報告されていることから (丹下ら, 2017)、「死に対する恐怖」などの死に焦点つけた側面は、より長期的な発達の中で心理的 well-being と連動する可能性も考えられよう。

また死に対する態度内で、死への恐怖が強まった場合、死後存在への民俗宗教的な信念や、死の有意義性の認識といった、死に関する認知の変化という対処を行う可能性が示唆された。今後、因果の方向性を特定する研究も必要となろう。

引用文献

- 西田 (2000). 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究 教育心理学研究, **48**, 433-443.
Ryff (1989). Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. Journal of Personality and Social Psychology, **57**, 1069-1081.
Ryff, et al. (2016). Purposeful Engagement, Healthy Aging, and the Brain. Current Behavioral Neuroscience Reports, **3**, 318-327.
丹下ら (2013). 中高年者に適用可能な死に対する態度尺度 (ATDS-A)の構成および信頼性・妥当性の検討 日本老年医学会雑誌, **50**, 88-95.
丹下ら (2017). 成人中・後期における死に対する態度と心理的 well-being 日本発達心理学会第 28 回大会。

表 潜在変化モデルによる解析結果: ATDS-AとPWBのレベルと変化の関連

	ATDS-A1 レベル 変化	ATDS-A2 レベル 変化	ATDS-A3 レベル 変化	ATDS-A4 レベル 変化	ATDS-A5 レベル 変化	PWB レベル 変化
ATDS レベル -A1 変化	-0.33				-0.37	
ATDS レベル -A2 変化		0.26		0.35	-0.20	
ATDS レベル -A3 変化		-0.30		0.44	0.45	
ATDS レベル -A4 変化			-0.33	0.23		0.37
ATDS レベル -A5 変化				-0.36		0.24
PWB レベル 変化					-0.32	-0.29

注)絶対値で0.2以上の相関係数値の箇所のみ記載。RMSEA=.039, CFI=.900。